

## 山北町東電山北発電所

### 対岸の逆断層

Reverse Fault seen on the opposite  
bank of Toden-Yamakita Water  
Power Plant

Isamu IMANAGA

今 永 勇

フィリピン海プレートに乗った伊豆が南東からやって来て本州プレートに衝突して押し合っているところが伊豆半島の付け根の地域であると言われる。そして衝突とか押し合いの応力が駿河礫層を切るKs断層(町田・他1975)など幾つかの断層を生じたとされる。ここに示す断層もそのような地域に発達した断層の1つで、山北駅西方1 km東電山北発電所の対岸に見られ、山崎稲雄(1971)によって段丘礫層を切るN30°E60°Wの逆断層と記述されたものである。筆者の観察によれば、この断層は足柄層群最下位層の日向凝灰質砂岩泥岩層とその上位層の瀬戸礫岩層の境界に沿ってズレた傾斜移動断層である。断層の走向、傾斜はN37°E, 56°W, 1 cm幅程度の断層粘土を挟み、断層面はなめらかで条線は認められない。上盤側は、瀬戸礫岩層が酒匂川の川床から約20 mの高さまであり、その上に段丘礫

層およびその上の褐色火山灰層が無いかあっても極くわずか(露頭が無く確認できない)である。下盤側は、河床から約5 mの高さまで日向凝灰質砂岩泥岩層があり、その傾斜は断層近くで60°Wを示す。その上に傾斜不整合に厚さ約3 mの段丘礫層が水平に堆積している。この礫層は大礫~巨礫の垂円礫で基質は細礫、礫種は丹沢山地起源の緑色凝灰岩類と石英閃緑岩で石英閃緑岩に大きなものが多く最大長径約60 cmである。礫のインブリケート構造は西から東への“流れ”を示すが富士山起源の礫は皆無である。礫層の上にスコリア層を挟む褐色火山灰層が乗り河床から約25 m続く。下盤側も上盤側も共に最上部に黒色スコリアからなる御殿場泥流堆積物が平行不整合に乗っている。断層を挟んで瀬戸礫岩層が西から東へ、日向凝灰質砂岩泥岩層及び段丘礫層と褐色火山灰層の上に乗り上げていて、断層のズレの落差は15 mはあると思われる。しかし御殿場泥流の堆積面である段丘の表面には断層による地形的食い違いは見られない、また断層の延長方向の地形には断層に横ずれ成分があった証拠は見あたらない。このようなことからこの断層は褐色火山灰層堆積後、御殿場泥流堆積前にできたKs断層と同系統の断層であると考えられる。

#### 文 献

町田洋・松島義章・今永勇 1975 富士山東麓駿河小山付近の第四系 第四紀研究 14, 77-89

山崎稲雄 1971 山北から酒水の滝へ 神奈川県地学のガイド 67-72

(神奈川県立博物館)



逆断層の露頭(位置は上図の×印)、左側が下盤、右側が上盤